

授業力は「書く力」に比例する

教師のための綴り方教室から

第12回・最終回 第3章「編集力を鍛える」④



「リレー形式」を活かせば、学校が大きく変わる

中嶋洋一 Nakashima Yoichi
(関西外国語大学教授・綴り方教室主宰)
監修

芦田真一郎 Ashida Shinichiro
(京都府亀岡市立亀岡中学校教諭)
ライター

中山浩太郎 Nakayama Kotaro
(大阪府寝屋川市立第五中学校教諭)
アドバイザー

人はなぜ、「リレー」で熱狂するのか

新春の箱根大学駅伝は多くの人がテレビに釘付けになる。後から来た選手がゴボウ抜きをする、次の走者にタスキがつかない、ゴール前で大逆転するなど、数々のドラマが生まれるからだ。体育祭でも、雰囲気が高潮になるのは最後のチーム（クラス）対抗のリレーだろう。リレーは個人走だが、栄冠はチーム全体に輝く。バトン・パスが決め手になるからだ。

リレー形式の活動が有効なのは授業でも同じだ。同時進行で一斉に行う活動と異なり、リレー形式になった途端、生徒はつながりや文脈を強く意識するようになる。ジグソー学習、four corners、紙上ディベート、連歌などがそう。連続性を考えるのは、脳が得意な分野なのである。だが、リレーにすれば全てうまくいくわけではない。大切なのは、何を「バトン」にするかである。

「リレー形式」は自己更新の機会を作る

「学習する」とは「自己更新をする」という意味である。それは過去の自分から受け取ったバトンを未来の自分に渡す「個人内リレー」とも考えられる。ジャーナル（日記）であっても、書き方や内容が変容していく。前の内容を読むことで、自分を客観視し、「もっとこう書きたい」と考えるようになる。つまり、表現力の向上には「中間地点での客観的な評価」が欠かせない。その有効性については本誌6月号で述べた。最終回は、「時間差のある学習」（Time-delayed activity）と「リレー形式の学習」が生徒の主体性を高めることについて述べる。

綴り方教室で行った月2回の「コラム・リレー」では、全員がテーマに沿ったコラムを書き、

リレーでつないだ。バトンゾーンとして4時間の猶予が設けられた。受講生は、この“時間差”を生かして、先に出されたコラムと自分の原稿の内容がつながるよう、ギリギリまで推敲を重ねた。この“時間差”によって生まれた主体的な取り組みが、個々の「編集力」を格段に向上させた。

次に、授業で「主体的な生徒」が育たなかった原因が「単発の協働学習」にあったことを反省し、中1で「友達紹介スピーチ」という課題で「リレー形式の学習」に挑戦した。最初の原稿を書かせた後、一旦回収し、1週間後にそのまま返却した。そして、その原稿を班で回し読みする時間を作った。ルールは「仲間の英文を読み、わかりにくい部分を見つけてコメントを書く」である。お互いの作品にコメントを書くことでself-involvement（当事者意識）が生まれる。内容を忘れかけているので、どの生徒も読者の立場で読める。「確かに！」仲間のアドバイスを素直に受け入れた生徒たちは、夢中になって原稿を推敲し始めた。

「リレー形式」は、究極のTime-delayed activity

生徒の変容に衝撃を受けた筆者は、このような協働学習（互惠学習）を日常的に行い、その中で書く力を高められないかと考えた。参考にしたのが、主宰のリレー・ノートの実践（三浦孝・中嶋洋一他著『ヒューマンな英語授業がしたい！』研究社）である。主宰の実践では、一定の言語材料が使えるようになる中2の2学期以降を想定しているが、今回は、プレ活動として中1の3学期に行ってみた。ねらいは、仲間と協力して、内容をつなげていく楽しさを実感できるようにすることにあった。

まず、B5判のノートを裁断機で横に3分割し、

各班に1冊ずつ配った。1人が1日1ページ（10行程度）を担当して書き、翌朝、次の人に渡す。教師の指示は「仲間の文章を読み、その内容を広げ、深めること」である。これで生徒の意欲に火がついた。ある生徒は前の生徒からノートを渡されると、すぐに読み始め、「えー?! この続きどうしよう」とつぶやきながら、仲間が時間をかけて書いた英文を何度も読み返していた。

そもそも言語材料とは、自分で使いながら身につけていくものである。教師の説明やプリントよりも、自分で修正をしたり、言い換えたりする方が言葉は定着しやすい。生徒の「書きたい!」という思いを引き出すには、教師の意図的な介入が必要だ。このTime-delayed activityは、一旦内容を自分の中で醸成させるので、「自己更新」と「互惠学習」の組み合わせが可能になる。

通常、学年通信や学級通信は、目先のことがテーマになることが多い。目的もなく、「1か月に1回発行」という目標で終わっているからだ。

解説（盛りと名残を作るために）

人が最もワクワクするのは、「校正」（推敲）の段階である。違和感やモヤ感のある部分に自分で気づける成就感。文脈にピタッとハマる内容考えた時に感じる達成感。それらは、クイズが解けた喜び、ジグソーパズルのピースが収まった快感に近い。そして、みるみる改善されていく文章を実感する高揚感。それらを日常的に味わうことで、ドーパミンが噴出し、ワクワクする。

「書く力と授業力は比例する」というテーマで、1年間連載をしてきた。「読解力・要約力・編集力」の高い教師の書く文章はわかりやすい。日々の授業も、教え上手ではなく、盛り上げ上手、のせ上手、ほめ上手である。授業で大事なものは、知識の授受ではなく、児童生徒との人間関係と「互惠学習」を土台にすることなのである。

連載を通して伝えたかったのは、「授業とは学級作り」であるということ、さらに「コミュニケーションとはこういうものだ」と口で教えるのではなく、「ああ、これがコミュニケーションなんだ」と児童生徒に実感させることの大切さである。

本稿（3月号原稿）を書いている今は、2021年11月。連載を「リレー形式」にすることも最初に決めた。QR資料も4月号から3月号までのも

しかし、4月の最初に1年間の内容（目次）と担当を決めておき、リレー形式にすると、取り組みが一変する。「見通し」と「線のつながり」が当事者意識を生み、担当者は自ら同僚や生徒から情報を収集し始める。意識が「他人ごと」から「自分ごと」に変わるからである。

生徒の声から

「リレーノート」に取り組んだ生徒の声である。

- ・「仲間の意見を読んでいて、普段意識しないことが話題になった時は読むのも書くのも楽しかったです」
- ・「自分だけでなく、色んな人の立場になって考えられていた。なりきって書かれたものは、読んでいて惹きつけられた。また、やりたい!」

●失敗の原因（一の原理原則）

「一斉に書いて、一斉に集める」という指導では、つながりがなく、こだわりが生まれにくい。

○成功の理由（十の原理原則）

思考を熟成させる「時間差」と、仲間から引き継いだ「責任」の2つが生徒を本気モードにする。

のを合わせると1冊の書籍になるようにした。

つなぐこと、続けることは難しい。だが、仲間と何かをつなぐ時、人は「使命感・責任感」を感じる。うまくつながった時は気持ちが高揚する。「つなげる」「つながる」のが得意な教師が多い学校は、互いに良い影響を与え合う「協働学習」が当たり前になっている。だから、職員室がサロンのように明るい。

一方、共同（分担作業）が習慣になっている学校では、個人で抱え込み、都合の悪いことはギリギリまで話さないことが多い。ハウレンソウで最も大事な「相談」が抜けてしまうのである。

「一枚の絵」を教職員全員で共有する。それが“Begin with the end in mind.”（S.R. コヴィ）である。「リレー」を完走し、歓喜に浸る生徒たちをイメージしてみよう。そのために、教師は「個人内リレー」を習慣にしよう。学習指導案に3色付箋紙を貼ってリニューアルする、授業ビデオを再度見て改善点を考えるなど、過去の自分を振り返り、未来の自分にバトンを渡すのだ。誰にも迷いはある。だが、やらなければ、前には進めない。「決心」さえすれば、今まで見たこともない景色が見られる。そこから物語が始まる。